

資料でたどる 古典芸能の舞台 神戸

会期: 令和4年6月22日(水)～9月2日(金) 土・日・祝日休室

時間: 午前10時～午後5時 *8月12日(金)～19日(金) 夏季休室

会場: 神戸女子大学古典芸能研究センター展示室

古典芸能研究センターでは、このたび開設20周年の記念出版物『伝説・物語の神戸を歩く』を刊行しました。今回は、この本の構想をもとに昨年秋に須磨離宮公園で開催した「資料でたどる古典芸能の舞台 神戸」の内容を、構成をかえて再展示します。そして、新たに、本で紹介した本学所蔵『須磨明石名所絵巻 縮写』の原本を初公開します。

神戸の地は、万葉のいにしへの時代から、多くの文学作品や古典芸能に登場しています。展示では、古典芸能にゆかりのある神戸の名所旧跡をとりあげ、江戸時代の名所図会類の記事や現在の様子などを、芸能作品とともにパネルと資料でわかりやすく紹介します。

〔展示目録〕

* 所蔵元の記載のないものは、神戸女子大学古典芸能研究センター蔵。
(文庫・特殊コレクション名のみ注記。)

1. 須磨明石名所絵巻 縮写

写 巻物(継紙) 紙本彩色 28.0×265.5cm

外題「須磨明石名所絵巻／寛文十二年 河上正継筆記」

布引滝近辺から明石城に至る、山陽道周辺の道中鳥瞰絵図。名所案内を主眼とし、村名・地名のほかにも名所旧跡を多く記し、簡略な注記や古歌が添えられている。展示部分は、前半の三分の二程度。

本資料は巻頭にも「寛文十二年／河上正継筆／須磨明石記／絵巻縮写」とあり、河上筆の須磨明石を描いた絵巻を「縮写」したらしい。原本に該当すると思われるものに、河上正綱筆、寛文十二(1672)年成立の地誌『須磨明石名所記』一軸(西尾市岩瀬文庫蔵、および鶴舞図書館(「浪花明石名所道中記」)があるが、現物未調査のため詳細は未詳。岩瀬文庫本(寸法27.3×751.0cm)は、「猪名ノ入江」「よし嶋」(現尼崎市)以西を描いており、本資料は西側のみを写したもののか。

神戸女子大学蔵

2. 田安家旧蔵版本番外謡曲集(四百番)「鱗形・**求塚**・現在江口・六代・鶴若」

小本1冊袋綴(五番綴、全20冊) 元禄2年(1689) 林和泉掾刊

貞享3年(1686)刊の三百番本(資料12)に続いて刊行された番外曲100番の揃本。装幀・版式も先行の三百番本に似せている。当時の、通行の定番曲以外の謡本刊行は、將軍綱吉・次代家宣の稀曲好みが反映したとされている。本資料は田安家(8代將軍徳川吉宗の次男を祖とする御三卿の一つ)旧蔵の善本。(志水文庫)

3. 「處女塚故事」(播磨名所巡覧図会 巻1)

大本袋綴 1冊(全5巻5冊の内) 文化元年(1804) 大坂 塩屋忠兵衛他刊

『万葉集』に始まり、『大和物語』、能「求塚」へと展開する菟名日処女説話の挿絵。処女を争う二人の男が、水鳥を射る競争をする場面。『播磨名所巡覧図会』は、大阪から赤穂までの地名や旧跡の由来を書いた、当時の旅行案内書(詳細42参照)。

4. 「仏母摩耶山切利天上寺図」(摂津名所図会 巻7)

大本袋綴 1冊(9巻12冊の内) 寛政8～10年(1796～98) 大坂 森本太助他刊

天上寺は「天竺法道仙人の創する所」で、秘仏の本尊十一面観音は、33年に一度のご開帳で知られる。『摂津名所図会』は、秋里籬島著の摂津国の旅行案内書(詳細41別掲)。

5. 堀池宗叱識語謡本「ゑひらの梅」(ほりけそうしつしきごうたいぼん えびらのうめ)

折本 1帖(全47帖の内) 室町末期・16世紀写

室町末期に活躍した京都の素人能役者・堀池宗叱（ほりけそうしつ）の謡本。表紙には、曲の内容にちなんだ金銀泥絵が描かれている。展示は能「箴」の謡本で、シテの梶原源太景季（かじわらげんたかげすえ）が箴に梅の枝を挿して戦ったという逸話にちなみ、表紙に梅の木を描く。（伊藤正義文庫）

6. 能狂言画帖「箴」

折本 1冊 明治41年（1908）写

能・狂言全19曲の絵が交互に描かれた画帖。展示は、能「箴」の後シテ・梶原源太景季を描いたもの。若武者姿で腰に梅花の枝を挿し、平太（へいだ）の面をつけている。（吉田文庫）

7. ひらかな盛衰記（ひらかなせいすいき）

半紙本袋綴 1冊 元文4年（1739）大坂 加島屋清助他刊

人形浄瑠璃「ひらかな盛衰記」の七行正本。5段。外題・内題に「逆櫓松／矢箴梅」の角書（つのがき）がつく。浄瑠璃の源平合戦物を代表する作品の1つであり、源義経の木曾義仲討伐から一ノ谷合戦までを、義仲の遺臣樋口次郎兼光（ひぐちのじろうかねみつ）の復讐と、梶原源太景季（かじわらげんたかげすえ）と千鳥の恋愛を中心に描く。初演時に大好評を博したらしく、翌年には歌舞伎でも上演されるようになった。父の梶原景時が受けた恩義に報いるため、宇治川先陣で佐々木高綱に勝ちを譲った源太が勘当される2段目「源太勘当」、船頭松右衛門に身をやつし秘伝の逆櫓を習った樋口兼光が、義経への仇討ちに失敗する3段目「逆櫓（さかろ）」、梅ヶ枝と改名して遊女となった千鳥が、無間（むげん）の鐘になぞらえて手水鉢を打ち、源太の出陣に必要な300両を手に入れる4段目「無間の鐘」が有名。（志水文庫）

8. ひらかな盛衰記 絵尽（ひらかなせいすいき えづくし）

半紙本袋綴 1冊 江戸刊

人形浄瑠璃「ひらかな盛衰記」の絵尽。絵尽是浄瑠璃・歌舞伎の筋書を絵本に仕立てたもので、上演に際し刊行された。展示資料と同じ絵尽しは、慶應義塾図書館にも所蔵されている（ただし、展示資料は、元表紙・目次・最終丁を欠く）。（志水文庫）

9. 伊勢物語 87段（首書伊勢・伊勢物語絵入読曲）

えいりよみくせ

半紙本袋綴 1冊（全3巻3冊の内） 貞享2年（1685）大文字屋・西村七郎衛門刊

既刊の絵入り『伊勢物語』の本文の上部に簡潔な注を入れて刊行された書。吉田定吉画。展示は、87段の後半、主人公兄弟が布引滝を訪れた部分の挿絵。（志水文庫）

10. 源平布引滝

半紙本袋綴 1冊 江戸中期刊カ

寛延2年（1749）11月大坂竹本座初演の浄瑠璃正本。作者は並木千柳と三好松洛。全五段の時代物。

『源平盛衰記』などに取材して、平清盛の暴虐ぶりと木曾義仲の出生などを題材にした作品。題名の由来は、「源平」は源氏平家の争いに材をとることから、「布引滝」は、初段の中の布引滝の段で、霊夢を蒙った清盛の命令により難波六郎が布引滝の滝壺に飛び込み、龍神から平家滅亡の神託をもらうという場面による。

（四世竹本相生太夫旧蔵資料）

11. 「有馬入湯客座敷」（摂津名所図会 巻9）

大本袋綴 1冊（9巻9冊の内） 寛政8～10年（1796～98）大坂 森本太助他刊

巻九に、有馬温泉の様子を描く記事とともに掲載する多くの挿絵のうちの一つ。湯治客の世話をする有馬の湯女は「お藤」に代表され、流行歌にもさまざまに歌われてきた。

12. 田安家旧蔵版本番外謡曲集（三百番）「太子・廣基・侍従重衡・聶入自然居士・**鼓瀧**」

小本袋綴 1冊（五番綴、全20冊） 貞享3年（1686）林和泉掾刊

定番の二百番（内組・外組）には含まれない、番外の謡本。当時の將軍綱吉・次代家宣の稀曲好みが謡本に反映したと言われている。節付法やその精粗が曲によって異なる点が特徴。この三百番本刊行後、さらに百番が追加して刊行された（四百番本、資料2）。（志水文庫）

13. 福王雪岑能狂言画卷「祇王」

紙本著色 卷子本 1軸 明和9年（1772）福王雪岑筆

能と狂言の彩色絵13図が交互に描かれた絵巻。全6紙。福王雪岑は、ワキ方福王流九世茂右衛門盛勝（もえもんもりかつ）の画号。絵巻の末尾に「右一軸/行年七十二歳雪岑筆（朱印）（朱印）」の落款があり、明和9年（1772）の雪岑72歳の時の作品。展示の「祇王」は、後場でシテ仏御前とツレ祇王が相舞を舞っている場面。右側はワキの瀬尾太郎。

* 福王雪岑（ふくおうせっしん） 元禄14年～天明5年（1701～1785）。

江戸中期の能楽師・絵師。雪岑は、ワキ方福王流九世茂右衛門盛勝^{もえもんもりかつ}（もえもんもりかつ）の画号。絵を画師の英一蝶（はなぶさ・いっちょう）に学び、能・狂言を題材とした絵をよく描いたほか、俳諧本の挿絵も手がけている。

14. 平家物語 巻7「経政の都落の事」

大本袋綴 1冊（全11巻11冊（巻6欠）の内） 宝永7年（1710）大坂 河内屋喜兵衛刊
江戸時代に出版された『平家物語』のうち、最も流布した系統の本で、平易な平仮名中心の本文に挿絵が入る。刷題簽「新板絵入平家物語」。展示の挿絵は、平家一門の都落ちの際に、琵琶の名器「青山（せいざん）」を返上するため、平経正が仁和寺の守覚法親王（しゅかくほっしんのう）の元を訪れた場面を描く。（志水文庫）

15. 堀池宗叱識語謡本「つねまさ」

折本 1帖（全47帖の内） 室町末期・16世紀写
室町末期に活躍した京都の素人能役者・堀池宗叱（ほりけそうしつ）の謡本。表紙には、曲の内容にちなんだ金銀泥絵が描かれている。展示は能「経正」の謡本で、表紙に描かれた遠景の松山は双ヶ丘（ならびがおか）、下の殿舎は「経正」の舞台・仁和寺（にんなじ）とみられる。（伊藤正義文庫）

16. 謡曲画誌「知章」（うたいのえほん ともあきら）

半紙本袋綴 1冊（全10巻3冊の内） 享保20年（1735）大坂 毛利田庄太郎刊
『謡曲画誌』は、全50曲の謡曲の概説書。曲のあらすじ、関連する和漢の故事・伝承、登場人物の批評などを載せる。展示は、巻6所収の能「知章」の解説の挿絵。敵を押さえ込んだ平知章が、敵の家来に首を討たれようとしている場面を描く。知章が源氏方の兵と交戦している間に、父の平知盛（たいらのとももり）は、名馬の井上黒（いのうめぐろ）に乗って、味方の船に落ちのびる。（伊藤正義文庫）

17. 江崎家旧蔵高安流謡本「放生川・**知章**・二人静・三山・狸々」

写本 半紙本袋綴 1冊
ワキ方高安流の謡本。各曲の冒頭に「脇装束」を付す。五番綴謡本42冊で計210曲の揃本。山口一男筆。姫路在住の福王流ワキ方江崎家当主（当時、十一世）が、高安流の能楽師から流儀は異なるが同じワキ方の家に託されて蔵していたという。高安流の謡本は公刊されたものもなく貴重な資料。（江崎家旧蔵資料）

18. 絵入謡本「道盛」

列帖装 1帖（全12帖の内） 江戸前期・17世紀写
謡曲の詞章に彩色の挿絵を組み合わせた豪華な謡本。もとは前田侯爵家旧蔵か。展示は、能「通盛」の挿絵。鳴門の浜で平家の人々を弔いながら読経する僧のもとに、漁翁夫婦（前シテ・前ツレ、実は平通盛と小宰相の霊）が、聴聞のために漁り舟に乗って訪れる場面を描く。

19. 金春謡装束并造物付

写本 中横本袋綴 1冊
能の面、装束、および作り物を記す書。巻頭に目録があり、「翁」から「関寺小町」までの115曲、さらに、付録として10曲（御裳濯・吉野・碓潜^{きり}・初雪・鶏立田・歌占・唐船・檀風・愛染川・現在鶴）の合計125曲を収録。面・装束は、シテ（後シテ分は「切」とする）以下アイまで諸役について詳しく記す。作り物は、彩色絵と寸法、舞台での扱いも書き添えられている。また、作り物がない場合でも、曲によっては小道具や装束の絵が入る。内容は江戸後期のもの。掲出箇所は「通盛」部分の後半で、作り物の篝火附舟を載せる。（伊藤正義文庫）

20. 平家物語 巻7「忠度の都落の事」

大本袋綴 1冊（11巻11冊（巻1欠）の内） 享保12年（1727）京都 村上勘兵衛刊
江戸時代に出版された『平家物語』のうち、最も流布した系統の本で、平易な平仮名中心の本文に挿絵が入る。刷題簽「改正絵入平家物語」。展示の挿絵は、平忠度（たいらのただのり）が都落ちの途中に引き返し、和歌の師・藤原俊成の元に自詠の和歌を書いた巻物を届け、勅撰集への入集を請う場面を描く。（志水文庫）

21. 平家物語 巻9「忠度の最期の事」

大本袋綴 1冊（11巻11冊（巻1欠）の内） 享保12年（1727）京都 村上勘兵衛刊
江戸時代に出版された『平家物語』のうち、最も流布した系統の本で、平易な平仮名中心の本文に挿絵が入る。刷題簽「改正絵入平家物語」。展示の挿絵は、忠度が源氏方の武将・岡部六弥太忠澄（おかべのろくやただずみ）と交戦し、六弥太の家来に右腕を打ち落とされる場面を描く。（志水文庫）

22. 堀池宗叱識語謡本「短冊たゝのり」

折本 1帖（全47帖の内） 室町末期・16世紀写
室町末期に活躍した京都の素人能役者・堀池宗叱（ほりけそうしつ）の謡本。表紙には、曲の内容にちなんだ金銀

泥絵が描かれている。展示は能「忠度」の謡本で、松林と網代（あじろ）が続く海浜の情景を描く。「忠度」の舞台である須磨の浦のイメージか。（伊藤正義文庫）

23. 狂言記 上巻「薩摩守」 半紙本袋綴 1冊（2巻5冊のうち） 寛文5年(1665) 板木源左衛門刊
『狂言記』は、江戸時代に市販された狂言台本。最初の『狂言記』（正篇）は万治3年（1660）刊で、続いて『狂言記外五十番』『続狂言記』『狂言記拾遺』と各50曲、計200番分が公刊された。いずれも「絵入」で舞台図挿絵を多数掲載するのが特徴。詞章は既存の狂言三流のものとは異なり、上方で活動していた町方群小狂言流派の台本によったと推測されている。本書は、万治3年版『狂言記』（正篇）51番から11番を抄出して上下2冊本に仕立てた寛文2年版を、5冊の分冊形式で出版した改刻本（丁数は上下巻2冊時のまま）。

展示箇所は「薩摩守」の後半、僧が渡し船に乗っている場面。（伊藤正義文庫）

*旧蔵者について：本資料は各冊の初丁表左下部に「宝玲文庫」の蔵書印がある。宝玲文庫は、英国人の言語学者フランク・ホーレー（Frank Hawley 1906～1961）の旧蔵書。ホーレーは日本語に堪能で、書誌学にも通じ古書を収集した。蔵書は、本草書、鯨および捕鯨に関する文献、琉球関係書、和紙に関する資料、古辞書などが中心。

24. 平家物語 巻9「敦盛最期の事」 大本袋綴 1冊（全11巻11冊（巻6欠）の内） 宝永7年（1710）大坂 河内屋喜兵衛刊
江戸時代に出版された『平家物語』のうち、最も流布した系統の本で、平易な平仮名中心の本文に挿絵が入る。刷題簽「新板絵入平家物語」。展示の挿絵は、敗走する平家一門の船を追いかける敦盛を、源氏方の武将・熊谷次郎直実（くまがいじろうなおぎね）が呼び止めたところ、敵に背中を見せまいと敦盛が引き返す場面を描く。（志水文庫）

25. 堀池宗叱識語謡本「あつもり」 折本 1帖（全47帖の内） 室町末期・16世紀写
室町末期に活躍した京都の素人能役者・堀池宗叱（ほりけそうしつ）の謡本。表紙には、曲の内容にちなんだ金銀泥絵が描かれている。展示は能「敦盛」の謡本で、春の野原の景色を描く。「敦盛」の前場に前シテの草刈男（実は敦盛の霊）が出ることにちなむか。（伊藤正義文庫）

いちのたにふたばぐんき
26. 一谷嫩軍記 半紙本袋綴 1冊 大阪 加島屋 竹中清助
宝暦元年（1751）大坂豊竹座初演の浄瑠璃正本。並木宗輔等6名の合作。本資料は、宝暦元年版を再板改正した明和四年版を近代になって再版したもので、三世相竹本相生太夫旧蔵。（四世竹本相生太夫旧蔵資料）

いちのたにふたばぐんき
27. 一谷嫩軍記 須磨浦段 半紙本袋綴 1冊 大阪 加島屋 竹中清助
資料26『一谷嫩軍記』のように作品全段を刊行した正本（丸本）に対して、二段目の「須磨浦の段」一場のみを抜き出して、語りに必要な「譜」を付して刊行された抜本。（義太夫節愛好家たちの稽古用で「稽古本」とも呼ぶ。）
本資料は、朱で譜の書入れがされている。「四世竹本相生太夫旧蔵資料」は、「床本」（文楽の太夫が実際に舞台上で語る時に使う五行書きの写本で、多くは大本サイズ）が多くを占めるが、この種の本も多数含まれており、実際に稽古に使った可能性も考えられる。（四世竹本相生太夫旧蔵資料）

28. 「須磨浦之図（行平と海人の図）（摂津名所図会 巻8）」 大本袋綴 1冊（9巻12冊の内） 寛政8～10年（1796～98）大坂 森本太助他刊
「須磨里」の項の説明前に載る須磨浦の挿絵。海辺にたたずむ貴公子と二人の娘は、言うまでもなく、能「松風」をふまえた在原行平と松風・村雨である。

29. 絵入謡本「松風」 列帖装 1帖（全12帖の内） 江戸前期・17世紀写
謡曲の詞章に彩色の挿絵を組み合わせた豪華な謡本。もとは前田侯爵家旧蔵か。展示は、能「松風」の挿絵。須磨の浦に松風（シテ）・村雨（ツレ）の海女の姉妹が現れ、月の下で潮を汲む場面を描く。側には、松風・村雨の旧跡である松の木が立つ。

30. 巳年竹本豊年蔵 半紙本袋綴 1冊 竹田出雲他著（京都）山本九兵衛・（大坂）山本九右衛門刊
竹本座の浄瑠璃作品のうち、道行、景事など特殊な段だけを集めた段物集。展示箇所は目録。「行平磯馴松」は「道行二世の笈摺」と四段目の「形見信夫摺」をおさめる。（志水文庫）

31. 逸題義太夫節段物集

横中本 袋綴 1冊 (大坂) 糸屋市兵衛刊

資料30『巳年竹本豊年蔵』と同様の段物集。奥付には「竹本豊竹両太夫」直伝の由をうたう。展示箇所は「行平磯馴松」の道行「二世の笈摺」。(志水文庫)

32. 狂言絵本五種(平家女護島/行平磯馴松) *外題

半紙本袋綴 1冊 天明～寛政頃 (大坂) 丹青堂刊

歌舞伎絵本を六種合綴し、新たに表紙をつけたもの。寛政・天明年間の大坂角座・角丸座の絵本を収める。展示は、寛政六年(1794)九月の大坂角座(座本浅尾奥次郎)の絵本の表紙。これは中村のしほ(二代目)が江戸へ移る前の最終記念公演(江戸下り御暇狂言)であった。演目の「鎌倉三代記/行平磯馴松 かたみの信夫摺」を合わせた絵になっている。(志水文庫)

33. おさな源氏 卷二 「須磨巻」

大本袋綴 1冊 (全10冊の内) 寛文12年(1672) 松会版

俳諧師の野々口立圃による幼少婦女子向け源氏物語梗概書(ダイジェスト版)。『源氏物語』各巻の梗概に挿絵を添える。本書は著者没後の寛文12年(1672)に、江戸で菱川師宣(?~1694)の挿絵で刊行された異版本。(志水文庫)

34. 遠間集 「須磨源氏」

写 半紙本 一冊

江戸期の「遠い曲(番外曲や稀曲)」の間狂言台本を集めた書。書名の読みは未詳。「須磨源氏」ほか全27曲の間狂言と狂言風流3番を収める。所収曲の大半は綱吉・家宣時代に復活上演され、鳥取池田藩や禁裏御所・仙洞御所などで上演された曲。慶長九年(1604)の豊臣秀吉七回忌に豊国神社臨時祭で演じられた新作能《太子》・《孫思邈》・《橘》を含む。内容は大半が大蔵流と認められるが、「須磨源氏」では冒頭の若木の桜を平忠度が植えたとする部分が驚流と共通するなど、他流と共通する部分もある。所収曲の半数近くは万治三年書写の『大蔵虎明間之一本』を祖本とし、また従来未見の間狂言台本と考えられる内容をも含む。(伊藤正義文庫)

35. 「村上帝霊跡図」(播磨名所巡覧図会 卷2)

大本袋綴 1冊 (5巻5冊の内) 文化元年(1804) 大坂 塩屋忠兵衛他刊

「須磨」の項の中の挿絵。「絃上といふ謡曲の趣を諺にいひ伝へり」とする。琵琶の名手藤原師長は、ここ須磨の地で出逢った老夫婦の琵琶琴を聞いて己の未熟を悟り、修行のための入唐を断念した。この老夫婦は、実は村上天皇と梨壺女御の化身で、琵琶の名器獅子丸を師長に授ける、という琵琶をめぐる音楽説話。

36. 福王雪岑能狂言画卷「絃上」

紙本著色・墨書 卷子本 1軸 江戸中期 福王雪岑筆

能と狂言の彩色絵18図が交互に描かれた絵巻。絵巻の末尾に「雪岑筆(朱印)」の落款がある。(雪岑については資料13参照。)全6紙。冒頭の「千歳」に始まり、10曲の能絵と7曲の狂言絵を収める。展示の絵は、能「絃上」の前場で、老人(前シテ・実は村上天皇の霊)と姥(前ツレ・実は梨壺女御の霊)が琵琶と琴を合奏し、それに感服した藤原師長(ふじわらのもろなが・ツレ)が小屋を抜け出そうとする場面を描く。(伊藤正義文庫)

37. 市川鯉三郎「ひらかな盛衰記」梅枝の図(いちかわこいさぶろう ひらかなせいすいき うめがえのず)

一枚摺 江戸後期刊

歌舞伎「ひらかな盛衰記」の梅ケ枝を演じる市川鯉三郎の役者絵。梅ケ枝は、梶原源太景季の愛人千鳥が、遊女になった時の名。源太の出陣に必要な準備金300両を用意するため、撞くと現世では富を得るが、来世では無間地獄に墮ちるといふ「無間の鐘(むげんのかね)」の伝説に倣って、手水鉢を打つ場面。梅ケ枝の名は、一ノ谷合戦において景季が箭に梅の枝を挿して戦った逸話に拠る。市川鯉三郎は、江戸後期に上方と江戸で活躍した3代目叶雛助(1812~1847)の前名とみられる。(志水文庫)

38. 新板大芝居鳥羽画姿飛廻双六(しんばんおおしばいとばえすがたとびまわりすごろく)

一枚摺 清谷画 江戸後期刊

鳥羽絵風の絵で、歌舞伎の場面が17図描かれた双六。振り始めは『本朝廿四孝(ほんちょうにじゅうしこう)』、上がりは『一谷嫩軍記(いちのたにふたばぐんき)』となっている。絵師の清谷(せいこく)は、江戸後期の京都で役者絵を描いた浮世絵師。版元は「京一條智恵/光院西入/平井板」とある。鳥羽絵は、江戸時代に流行した滑稽な戯画で、手足がひょろ長く、目は黒丸で簡略化され、口が大きく描かれるのが特徴。マスの順番は以下の通りとなっている。「ふりはじめ」(『本朝廿四孝』)→「夕霧伊左衛門」→「出入り湊」→「亀山嘶し」(「中野藤兵衛」)→「染模様」→「襦袢の錦」→「忠臣蔵」→「秋葉山」→「梅川忠兵衛」→「双蝶々廓咄」→「八陣舟之段」→「菅原伝授」→「隅田川」→「新薄雪」→「恋女房染分手綱」→「芋源氏」→「一ノ谷嫩軍記」。(志水文庫)

39. 平敦盛図

木版色摺り 1枚

旧蔵者のメモによると、行燈絵であるらしい。一の谷の合戦で平家方が敗走し、須磨の浜に1人取り残された敦盛が、馬で味方の船を追いかけていたところ、熊谷次郎直実と呼び止められ振り返った場面を描く。「敦盛最期」の絵図として広く親しまれた意匠。
(志水文庫)

40. 小敦盛 (こあつもり)

横本袋綴 1冊 (下冊欠) 全12丁 江戸前期刊

御伽草子『小敦盛』の丹緑本 (たんろくぼん)。一の谷の合戦は多くの悲劇を生み出したが、その中でもとりわけ有名なのが、弱冠17歳 (16歳とも) の笛の名手平敦盛を、源氏方の武将熊谷直実が心ならずも討ち取った逸話である。御伽草子『小敦盛』はその後日談に当たり、敦盛には一子を設けた妻がおり、法然上人に養育されたその男児が、賀茂明神の夢によって生田を訪ね、夢の中で父敦盛の亡霊と対面するというストーリーが展開する。御伽草子『小敦盛』は、敦盛の最期と直実の出家を物語の前半に持つ古絵巻系と、その部分を欠く渋川版御伽草子系の2系統に大きく分かれるが、本資料は後者の渋川版御伽草子の同作と同じ板木を用い、丹・緑・黄・銀などで彩色した丹緑本である。紺地銀泥表紙の中央に「こあつもり 上」の刷題簽、見返しには銀箔を散らした、全体に豪華な作りの本となっている。御伽草子『小敦盛』は金春禪鳳作の能《生田敦盛》とほぼ同内容であり、16世紀初には後日談の原話が形成されていたと推測されている。また、同じく後日談を扱った作品に古浄瑠璃『こあつもり』がある。
(志水文庫)

41. 撰津名所図会

大本袋綴 全9巻9冊 寛政8～10年 (1796～98) 大坂 森本太助他刊 秋里籬島著・竹原春朝斎ほか画

京都で出版された『都名所図会』(安永9年 [1780]) に始まる「名所図会」シリーズの一書で、撰津国 (現在の大阪府北部から兵庫県南東部の地域) の名所を絵入りで紹介した、近世大坂を代表する地誌。名所旧跡はもちろんのこと、祭礼・風俗習慣・特産物などについて、詩歌をまじえて平易に解説しており、現地取材に基づく細密かつ写実的な挿絵とあいまって、娯楽的な読み物として好評を博した。寛政8年 (1796) 9月にまず第7巻～巻9巻までの3巻4冊 (現兵庫県側)、寛政10年 (1798) 9月に第1巻～巻6巻までの6巻8冊を刊行。絵図は過半数が竹原春朝斎の作で、他の絵師は丹羽桃溪、竹原春泉斎、下河辺維恵、石田友汀、西村楠亭、西村中和、秀雪亭だったが、全12冊刊行後、竹原春朝斎以外の絵は大半が丹羽桃溪のものにさしかえられている。

展示箇所はいずれも挿絵で、巻8「兵庫築嶋寺」／巻1「住吉大社」／巻4上「三井呉服店」。

42. 播磨名所巡覧図会 (播州名所巡覧図絵)

大本袋綴 全5巻5冊 文化元年 (1804) 大坂 塩屋忠兵衛ほか刊 秦 (村上) 石田編・中井藍江画

大阪から赤穂までの地名や旧跡の由来を書いた、当時の旅行案内。名所には和歌や古典などが紹介されている。第5巻末尾の説明には「大坂より播州室津までの紀行・神社・仏閣・故事・来歴・名所・古跡・山川・浦々・宿駅等、絵図を正写になし、鄙々・俗語に至る迄残らず集め、名所考察の便」にしたものという。巻1は神崎川から和田岬まで、巻2は長田から魚住まで、巻3は土山からのり方まで、巻4は御着から家島まで、巻5は竜野から赤穂までを、ほぼ海岸沿いに紹介する。

展示箇所はいずれも挿絵で、巻3「高砂社」と巻4「書写山圓教寺」。

[資料以外]

A 「能楽蒔絵膳」箆

製作年不明 黒漆塗 金・銀研出蒔絵 色漆 1客

能・狂言の演目を漆絵で描いた膳。展示品は「箆」、後場で主人公の梶原景季が登場している場面を描く。

B 能面「十六」

平敦盛の容貌をモデルとした能面。八の字の作り眉にお歯黒で染めた上歯をのぞかせる、可憐な美少年の造形。能面「敦盛」と互換性が高く、能《敦盛》や《生田敦盛》などで使用する。敦盛は、弱冠16歳で熊谷直実によって須磨の海辺で討たれた笛の名手。

C 能中啓「平家修羅扇 立浪日輪図」

能の舞台で使う扇「中啓」の図柄は役柄に応じて決まっており、武者を描く修羅能で平家の武将が主人公の時は、このような波濤に入り日の描かれた平家修羅扇を持つ。平家は源平の戦で負けたので、この扇は「負修羅扇」とも呼ばれている。

[参考] 兵庫名所記 (写真)

半紙本袋綴 2巻1冊 宝永7年 (1710) 兵庫津 菊屋新右衛門刊

兵庫を中心とした、神崎 (現尼崎市) から境川 (神戸市) までの名所を解説した書。植田下省子著。